5.悪性腫瘍・病理

[P05-03]Examination of the frequency of micronucleus in oral scraping cytology

○Kazuhiro Kawamura[1], Ayaka Abe[1], Kenji Kawano[1] (1.Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Faculty of Medicine, Oita university, Oita, Japan)

ポスターを表示

【目的】遺伝子損傷の指標の一つとされる micronucleus（ MN）は、 DNAに生じた切断が修復されずに残るために生じる細胞核の断片である。 今回口腔擦過細胞診検体に対して MN頻度を測定し、口腔粘膜病変におけるその有用性について検討することを目的とした。
【方法】2016年から2020年の間に大分大学医学部歯科口腔外科で治療を行い、最終病理診断で異型のない過角化症(Keratosis)、上皮性異形成（ OED）、扁平上皮癌(Sq.C.C.)の診断を得た、それぞれ5例ずつ、計15例を対象とした。口腔細胞診の判定は NILM、 LSIL、 HSIL、 SCCの4段階とした。 MN頻度は、 Tolbertらの判定基準を参考とした。電子カルテより患者の性別、年齢、喫煙歴の有無を抽出し、また HE標本から上皮性異形成であれば異型度、扁平上皮癌であれば分化度を判定した。
【結果】男女比、年齢は MN頻度と有意差はなかった。喫煙指数と MN頻度との間に正の相関を認めた（ r=0.617）。 Keratosis、 OED、 Sq.C.C.の順に MN頻度が増加し、 Keratosisと Sq.C.C.間で明らかな有意差を認めた（ p=0.005）。 OEDの異型度および Sq.C.C.の分化度については異型が強くなるに従い、そして分化が低くなるに従い MN頻度の増加傾向が示唆された。また NILMと判定した症例のなかで最終病理診断が OEDや Sq.C.C.と診断された症例は Keratosisと診断された症例より MN頻度が多い傾向であった。
【考察】最終病理診断と MN頻度において関連性を認め、特に異型がないと判定された NILMにおいて MN頻度を測定することで悪性の可能性を示唆することができるため、有用であるといえる。

©Japanese Society of Oral Oncology